

韓国先史文化と文化資源学

吉田 泰幸

国際文化資源学研究センター 博士研究員

1. はじめに

派遣期間は2011年7月22日から9月23日の約二ヶ月間であった。受入教員になっていただいた国立木浦大学校人文学部の金建洙先生から多くの協力を得ることができ、遺跡踏査、発掘調査への参加、遺跡公園や博物館の見学等をおこなった。全羅南道の光州広域市を起点に上記活動をおこない、訪問・滞在先は図1にまとめた。全羅南道での主たる滞在以外にも、出入国の関係で首都ソウルにも短期間滞在した他、韓国の面積と高速バスの利便さ等も手伝い、多くの都市の博物館や文化遺産（あるいは文化資源としての可能性を有する何か）を訪問することができた。

2. 先史文化という概念

「先史文化」は字義的には文献史以前の時代の文化、あるいは無文字社会の文化という意味になるが、その線引きは容易ではない。「先史」という概念自体に疑

義が向けられることもある。多くの地域は、文字を有する所謂「文明」によって記述対象となることから「先史時代」の終わりの始まりとなる。東アジアでは、それは古代中国文明との接触時期ということになるだろう。その接触のあり方がその後の諸文化の展開を左右し、現代社会における先史文化の取り扱い＝資源化に大きく影響していると考えられる。ここでも、曖昧さを有する古代中国文明との接触時期＝文明によって記述対象となる時期とそれ以前の文化、程度概念としておきたい。韓国考古学の時代区分では、原三国時代以前、ということになるだろう。

3. 新石器時代貝塚の踏査

韓半島新石器時代／日本列島縄文時代研究

地形的に日本・九州島北部地域と韓国・南海岸地域を隔てる現在の海峡が形成された後も、その近接さも手伝い、海峡を越えた交流がかなり古い時期からみられることが多くの論者によって指摘されている。その場合、両地域で共通する物質文化の存在がその根拠となっている。何千年も前の韓半島新石器時代（諸説あるが紀元前6,000年～紀元前1,000年ごろ）／日本列島縄文時代（こちらも諸説あるが紀元前13,000～紀元前500年ごろ）でもこのことは顕著であり、その様相を「環対馬海峡文化圏」と位置づける見解もあれば（木村,2003）、仔細にみれば、その時期にはすでに海峡間で「言葉」による情報伝達ができないくらい、両者は互いに「異文化」であり、同一文化圏として高く評価することは難しい、とする見解もある（水ノ江,2003・07）。

現代においても、海峡間での新石器時代研究者間の交流が盛んであり、「日韓／韓日新石器時代研究会」は回を重ねている。新石器時代研究以外でも、両国間ではかねてより考古学研究上の人的交流が盛んである。そのことは多方面で影響を与え合っているし、研

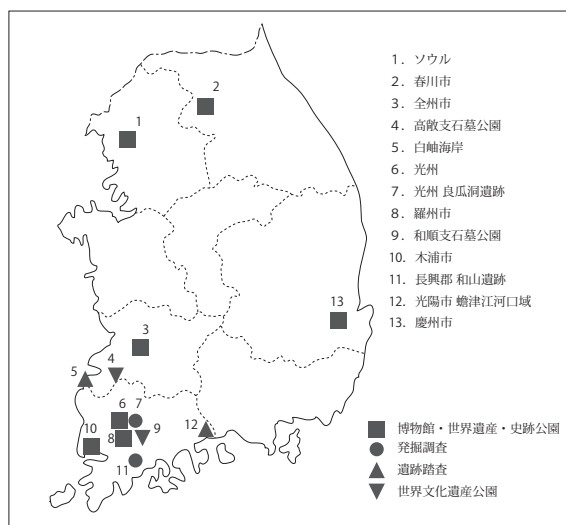


図1 滞在・訪問先

究フィールドおよび方法論の共有も進んでいる状態と言える¹。

筆者は韓半島の新石器時代併行、日本列島の縄文時代の研究を主として行っているが、名古屋大学在学時に金建洙先生が留学生として在籍していたこと、研究室旅行での韓国訪問、上記の日韓／韓日新石器時代研究会に数回参加したこと等から、韓半島新石器時代への関心も多少ながら持ち続けていた。今回は、木浦大学の考古学研究室にて調査・研究がなされている光陽市蟾津江流域の新石器時代貝塚群（図1－12）を踏査することができた。まずはこの貝塚群の研究上の位置づけについて考えたい。

光陽市蟾津江(섬진강)流域の新石器時代貝塚群

貝塚群のうち、敦卓貝塚(돈탁포총)は近年光陽市が木浦大学考古学研究室に委託する形で発掘調査がおこなわれ、整理作業がおこなわれている。その結果、敦卓貝塚はハマグリ主体の新石器時代晩期(日本列島縄文時代後期)にほぼ相当する約4,000～3,000年前)貝塚であることが判明してきたが、同じ蟾津江流域には、時期／貝組成を異にする貝塚が複数存在する。敦卓貝塚よりさらに数キロ内陸に入った地点にはマガキ主体／新石器時代前期(日本列島縄文時代前期)にほぼ相当する約5,000～6,000年前)の慶尚南道牧島貝塚(목도포총)があり、敦卓貝塚よりも若干河口側に位置する사평포총(さびよん貝塚)はマガキ主体／新石器時代前期の貝塚、という具合である。これらから前期と晩期では、周辺水域の環境および水産資源への適応形態が異なっていたことが推察される。貝塚の貝組成から海進・海退といった古環境変化等を推察するという方法は、日本の関東地方の他、複数の地域にて試みられ、今なお洗練が進んでいる方法である。蟾津江流域における貝塚群は、日本列島では縄文時代前期にピークを迎えたとされる「縄文海進」と称される海進現象、その後の海退現象が韓半島ではどのようなものだったか、およびそうした環境変化に対する人類の適応形態の変化を研究するのに良好なフィールドと言える。

こうした学術上の重要性から、敦卓貝塚は史跡級の貝塚と金建洙先生は評価しているが、市職員は指定には消極的とのことだった。その理由は史跡化が住民の



写真1 敦卓貝塚

生活を不便にする可能性がある、とのことだった。確かに敦卓貝塚周辺は住宅地で、主体と思しき地点も民家の庭である(写真1)。研究者としての懸念は貝塚主体部が失われることだが、史跡化は土地変更の制限にも繋がるだろうから、市職員の懸念も市民側に立てば当然出てくる類のものである。

蟾津江流域の貝塚群は研究上の資源としては多大な可能性に満ちているが、この貝塚群に限らず、先史文化遺跡の文化資源化、といった場合にはどのような可能性、方法があり得、そこにはどのような課題があるのだろうか。現在、貝塚周辺の地域は商品作物の栽培で安定した収入を得ているらしく、ある種の均衡が保たれている故に貝塚の損壊が問題になるわけでもなく、整備の必要性を強調する必要もない状態である。とは言え、この現況に変化が訪れたときに備えておくことは必要だろう。この点については後に考察したい。

4. 韓国の発掘調査

「救済発掘」への参加

全羅南道にて光州市良瓜洞(양외동)遺跡(図1－7)、長興郡和山(화산)遺跡(同11、写真2)の発掘調査に参加することができた。

両遺跡とも財団法人大韓文化遺産研究センターが主体となった、大規模土木工事にともなう事前調査であった。この種の調査は韓国では「救済発掘」(구제발굴)と呼ばれている。その財源は工事を行う

¹ その他、全羅南道に新設されたある文化財研究所には、日本の研究者から図書の寄贈がおこなわれたことも耳にした。大学への個人蔵書の寄贈計画も存在し、今後もソフト・ハード両面での協力が続いていくと思われる。



写真2 和山遺跡遠景

原因者の負担という、日本と同様の方式がとられている。発掘調査はすべからく学術的であるべきという立場からは、「救済発掘」という言葉自体に、発掘調査とその対象となる遺跡のランク付けを追認するはたらきがあることを問題視する意見もある。この辺りの事情は、同じく大規模土木工事に伴う記録・保存のための発掘調査である「行政発掘」に対する複雑な感情や疑問の声が絶えなかった日本と同様である。行政発掘／救済発掘は予算規模の大きさから広大な範囲を一度に調査することも多く、そうした調査ならではの情報が得られることも多い。長興郡和山遺跡はそうした例に含まれる。

この遺跡に特徴的な遺構は、多数の「陥穽遺構(함정유구)」である。大型のピットが丘陵長軸上に一定の間隔でみられた。工業団地の造成で丘陵をまるごと剥ぐような規模の調査ならではの発見と言える。ピットからの出土遺物等はほとんどなく、その構築時期の判定は周辺遺跡の時期や「陥穽遺構」から採取した土壌サンプルの分析結果等を待つしかない。後述のように2年以内に調査報告書が刊行されるだろうから、調査主体である大韓文化遺産研究センターのホームページ²で伺えること以外の詳細はここでは控えるが、同様の遺構は日本列島でも縄文時代の早い時期からみられることで知られている。

このようなピットが文字どおり狩猟のための「陥し穴」かどうかは日本でも議論されたことがあり、「陥

し穴」説が有力ではあるものの、議論が継続されているところである。韓国でもこうしたピット群を積極的に狩猟用の陥し穴とする論文があり(김도현,2005)、日本において「陥し穴」説を展開している研究者の論を参照して書かれている。日本では専ら民俗例にみられる「陥し穴」と発掘調査で得られた「陥し穴」のサイズの差異から、「陥し穴」説が疑問視されたことがある。民俗例に重きを置きすぎることに対する疑義から、当時に想定される狩猟システム全体の復元を重要視し、そうした作業からこの種の遺構を位置付けなおす試みもある(佐藤,2000)。日本での研究の推移をみれば、韓国でも民俗考古学的研究の蓄積が待たれるが、狩猟技術に関する民俗／民族考古学が必ずしも盛んでないのは韓国でも同様で、特に海／山に関する民俗と単純に区分した場合、後者がより低調という事情もあるらしい。議論の行方はどうであれ、救済発掘によって望外に得られた資料の共有だけでなく、論点の共有を進めることが今後の課題と考えられる。

救済発掘の担い手

上述の大韓文化遺産研究センターは、日本で言えば各県や、一部の市町村にみられる「埋蔵文化財センター」に相当する機関と言える。韓国には同様の調査研究センターが80弱存在するようである³。日本の埋蔵文化財センターと異なり、都道府県や市町村といった公的セクターの外郭団体という扱いはない。では、日本における民間企業としての発掘調査のサポート会社のような位置づけか、と言うとそれとも異なる。発掘調査報告書の発行主体として行政機関と共に名を連ねることが一般的で、所謂「普及教育活動」をおこなうこともある。長興郡和山遺跡は発掘区を複数機関で分担するほど広大な調査区だったが、隣の発掘区を担当していた機関は、調査期間中、小学生向け見学会を開催していた(写真3)。光州特別市内にある大韓文化遺産調査センター事務所を訪れた際には、当センターも同様の活動をおこなっていたことがうかがわれた。こうした発掘調査だけにとどまらない事業の多様化は、意識的におこなわれているようである。

その他、日韓の制度上の大きな違いとしてよく指摘

² 大韓文化遺産研究センターのホームページ <http://www.dhcenter.or.kr/s5/s4.php?mode=view&searchWhere=&searchKey=&page=1&nIdx=1063> 2012年1月。

³ 金建洙先生が留学を終えて帰国した90年代末にはこうしたセンターの数は10前後だったらしく、その増加は急激と言える。また、答える相手によって数字が異なり、誰も正確な数は把握できていない。



写真3 和山遺跡見学会

されるのは、「調査報告書を2年以内に文化財庁長に提出すること」という「埋蔵文化財保護及び調査に関する法令」⁴の第15条の厳格適用がなされていることである。報告書が期限内に刊行できなかった場合、調査事業の入札において著しく不利に働き、発掘許可が下りないこともある。「2年以内というのは発掘調査終了日から数えて2年以内」で、センターの調査員は野外調査と、かつて発掘調査をおこなった遺跡の報告書作成を掛け持ちしている状態であった。韓国の調査員からは「日本の報告書は分析をしっかりとってから刊行されるが、私たちは2年という短い期間で刊行しなければならない」ということを嘆いていたが、一方で予算化のタイミングを逃すと著しく刊行が遅れたり、未刊行のままになっている日本の遺跡の事例を知る身としては複雑な心境だった。発掘調査から報告書刊行までが一連の事業と意識せざるをえない仕組みになっているのは、韓国の制度の評価すべき点であるかもしれないが、報告書の質については韓国の研究者も問題視している。今でも同第2項によって、長期間の研究を要する遺跡等は2年以上の報告書作成期間が許可されているということだが、常に適正なバランスの模索が求められるだろう。

韓国の面積で80弱という調査センターの数について、常に競争が活発とも言えるが、行政区画や遺跡というひとつの場における継続性に欠けるとも言える。また、多くの研究者が数年後にはこれらの機関の統廃合が問題になるとみている。開発事業が一段落したこ

ろのこうした機関の統廃合、という点においては、日本の方が先に問題になる可能性があるし、行政発掘／救済発掘によって蓄積した膨大な資料や情報を今後どのように保護・管理・活用していくかについては、問題を先取りしている分、日本の方が試行錯誤を先行しておこなうことにもなるだろう。そこで得られるであろうノウハウを両国で共有する必要がある。

その場合の活動の起点のひとつとなりうるのが博物館と考えるが、以下では韓国の博物館を考古学展示を中心にみていきたい。

5. 韓国の博物館

韓国における博物館の特徴

韓国における博物館の大きな特徴は、ソウルに国立中央博物館があり、各道（日本の県に相当）にも国立博物館が存在していることである。どちらも歴史系博物館を中心に、美術館も併設する作りになっており、さらにキッズミュージアム等の施設もあることが多い。こうした中央集権的な制度設計がなされている結果、所蔵コレクションに関しても同様で、所謂「優品」は国立中央博物館の所蔵となるケースが多い。韓国は様々な国からの「文化財返還問題」に関心が高いが⁵、国内におけるパワーバランスを背景にした文化財の偏在も一方で顕著と言える。韓国の優品が一同に会しているという点では、外国人には便利とも言えるが、今後、地方に博物館が新設されることが増えた場合には、この点は問題になりそうである。

その他、国立と名がつく各道の博物館における展示キャプションの多言語表記（ハングル、英・中国・日本語）と、教員等をリタイアした方々による展示解説ボランティアによる多言語対応も、印象に残った点のひとつである。この点を、日本の多くの県立博物館レベルでも達成できていない点、とするか、そもそも日本と韓国では国情も博物館でターゲットとする来館者像も違うのでやむを得ない、とするかは意見の分かれるところだろう。

韓国における考古学展示

⁴ 韓国文化財庁のホームページ http://www.cha.go.kr/korea/seek/law.jsp?mc=NS_03_03_02 中の 매장문화재 보호 및 조사에 관한 법률 2012年1月。

⁵ 見学時は朝鮮王朝の宮廷儀礼の記録である外奎章閣儀軌の、フランスからの「帰還」を祝う特別展が開催されていた。フランス側はあくまで「返還」ではなく「貸与」と位置づけている。

ベネディクト・アンダーソンが東南アジア諸国のナショナリズムを検討する際に、博物館にも触れており、それによればただの「考古学的関係」でしかないものが、「場の歴史的奥行き」を創出していくという、博物館における考古学的コレクションの価値形成メカニズムを説いた部分がある（ベネディクト、白石訳,2007）。地中から掘り出される考古資料は、その土地が制度上はある国家の「国土」である以上、アカデミアの世界で人類史としての考古学を謳ったとしても、上記のメカニズムで国民文化的な神話の生成と流通に大きな役割を果たすのが宿命のひとつと言える。日本の博物館とその中の展示も、そのあり方を俯瞰してみればその特徴が当てはまり、ある種の政治性が顕著な存在なのだろう。えてしてそうした特徴は自国以外の博物館のあり方を目にした時に鮮明に見えるのが常だと思われるが、そうした意識のもとに韓国の博物館、その中の考古学展示をみたときには、上記の「歴史的奥行き」を作り出す「場」が、現在の韓国国境の外にもあることに大きな特徴がある。

韓国の国立中央博物館は、かつてはソウル特別市中心部の旧・朝鮮総督府の建物内にあったが、総督府庁舎撤去後、現在は市南部に移転している（写真4）。リニューアル後の国立中央博物館で始まった試みとして目をひくのが、「古朝鮮」⁶の展示である。現在の中国東北部を中心とした地域にみられる青銅器時代の考古学的アセンブリッジ（＝考古学的関係）を古朝鮮として展示する一室がある（写真5）。地方各道の国立博物館においてタイムラインを示す壁面キャプションがある場合にも、その中に古朝鮮の名がみられることがある。この古朝鮮とされた範囲は文玉杓氏によって、近年の韓国人による歴史・民族色の濃いツーリズムとされた、中国東北部での旅行先と重なる地域である（Moon,2011）。文玉杓氏が紹介した観光の対象は、主に高句麗・渤海期の遺産ということだが、同地域における青銅器時代の考古学資料も現代韓国にとってはある種の資源であることを示している。

また、国立中央博物館がリニューアル開館した年の特別展が、韓国で言うところの独島（日本で言うところの島根県竹島）であったのも著名である。こうした面が顕著になるのは人文・歴史系だけでなく、自然系



写真4 国立中央博物館



写真5 古朝鮮展示室

も同様で、木浦市立自然史博物館（図1-10）を訪れた際には「独島の海洋生物」という特別展が開催されていた。懸念されるのは領土問題の時間的深度が無制限に深くなり、ついには先史文化にまで及ぶことであるが、現在のところは、あくまで笑い話として竹島／独島問題の解決には櫛目土器（韓半島新石器時代を特徴づける土器）を竹島／独島に撒けばいい、という話がなされる程度にとどまっている⁷。

6. 考古文化の資源化に関する一考察

Master Narrative と Alternative Cultural Narrative

前章でとりあげた博物館は、その成り立ち等から、いきおいナショナリズムとの関係を分析の視点とせざ

⁶ 『三国遺事』等の後世の史書にその名がある古代王朝。近年の韓国国定教科書ではこの存在を積極的に評価する方向に振れつつある、とのことだが、一方でそうした方針に慎重な意見も存在する。

⁷ ある市民向け講演会での講師の発言。

るを得ないところがある。筆者は前年の派遣先であるベトナムでも、Fumko Ikawa-Smith 氏の東アジアにおける考古学と National Identity の 3 類型 (Ikawa-Smith, 1999) を手がかりに博物館における先史考古学関連の展示表象を検討した。

その 3 類型とは、

モデル 1: 中国、ベトナム、北朝鮮に顕著な The indigenous development model (土着発展モデル)

モデル 2: 日本に顕著な The continuity with assimilation model (同一性連続モデル)

モデル 3: 韓国に顕著な The single ancestral model (単一始祖系譜モデル)

結果、この 3 類型の汎用性を認めつつも、ベトナムにおける銅鼓の各種表象にはモデル 1・2 の両特徴がみられるなど、若干の改変を必要とする、とした (吉田, 2011)。韓国の上記の様相、特に古朝鮮の扱い等は典型的なモデル 3 と位置づけられ、この 3 類型は有効な分析視点であることには違いない。その一方で、現地に対話する研究者の意識や、そうしたインテリ層に限らず、例えばベトナムにおける大衆のプロパガンダ・アートの商用利用、という側面等を考えると、人々がナショナリズムという大きな物語だけに没入する訳ではない以上、考古学に関連する文化資源と人々との関わりについては、多様な視点の必要性も感じている。

金沢大学日中無形文化遺産プロジェクトの報告書中で、John Ertl 氏は、日本列島の考古学的成果は、国家形成という Master Narrative への動員ツールとしての側面がありつつも、個々の考古学的遺跡周辺には、それとは異なる Alternative Cultural Narrative が生成されていることを指摘している (Ertl, 2011)。こうした概念整理のもとに、現代社会における遺跡の史跡化の過程をみると、確かに大きな物語 = Master Narrative のみならず、対となる Alternative Cultural Narrative を基盤とした例や、史跡化に伴う後者の多様な生成、という分析視点を得ることができる。

Master Narrative という面では、日本では特に第二次世界大戦後、日本列島という現在の国土の領域内で、文化や国民性の同一性を際限なく遡らせる特徴が指摘されているが⁸、韓国では前章での博物館展示の特徴が示すように、過去にあり得た／未来にあり得る領域



写真 6 元・甕置き場支石墓

への意識が強い。慶州博物館 (図 1 - 13) のキャプションでは新石器時代以前の文化の担い手について、当地域の古代国家である新羅を作った人々とは直接関係がない、との記述があるくらい、現在の「われわれ」の出発点として、過去のどの時点を重要視するかは個々の Master Narrative において差異がある。日本列島に展開した先史文化の担い手がなんとなく現「日本人」の直接の祖先とされる傾向がある日本と、そうとも限らず、そのルーツを現在の国土以外に求める傾向のある韓国では先史文化遺跡の史跡化の諸相が異なるだろう。

現在の「われわれ」の出発点とは言えなくとも、世界文化遺産という、種々問題はありつつも人類全体の遺産と指定された支石墓公園が、全羅道には二つある (図 1 - 4、9)。この地域には青銅器時代の支石墓が高密度で分布しており、指定を目指した分布調査等が行われた後、2000 年に世界文化遺産に登録されている。そこでは人類全体の遺産という国家を越えた大きな物語がこの場で機能したり、外国人観光客が多い訳でもなく、両公園とも、少なくとも第一義的には周辺住民の憩いの場として機能していることが伺われた。特に高敞支石墓公園は出土遺物が少ないという事情もあって、3D シアターを有する附設博物館をはじめ、園内は年少者や家族連れをターゲットにした施設整備が顕著であった。案内していただいた金建洙先生によれば、かつては公園内にあった民家がみられない、ということであったから、整備のための立ち退き要求等を含めた民家の移動があったことが伺われ、隣接地に

⁸ 戦前、戦中の大日本帝国期にその版図が拡大していた時期には異なる特徴がみられたことは、(小熊, 1995) 等に詳しい。



写真7 白岫海岸干潟

広がる耕作地での農作業の合間に休憩をする人々がいたり、公園周辺では民家近くの甕置き場内にあることから「甕置き場支石墓」とガイドブックに紹介されている支石墓の周りにも既に民家も甕置き場もなかったり（写真6）、と様々な史跡化に伴う Narrative が生成されていることと思われる。そうしたものに目を向け、掬い上げることも今後の史跡マネジメントには重要な要素と考えられるが、以下ではそこまでミクロでもなく、かといってマクロでもない中間レイヤーに焦点をしばって考察を進めたい。

Alternative Cultural Narrative としての「里山」と先史文化遺跡

日本における近年の状況として興味深いのは、『遺跡学研究』第7号で、韓国新石器時代併行の縄文時代遺跡の整備状況についての特集が組まれたことがあるが、それを見ると実に多くの遺跡公園で「里山」をキーワードとした自然再生事業をおこなっていることである。この場合の「里山」は多義的で、当初の意味からも離れているし、堂下恵氏が2010年開催の文化資源学リネージュ金沢セミナーにおいて紹介した「里山」(Doshita,2010)とも異なるだろう。遺跡公園での「里山」は最大公約数的には「かつての『里山』のように常に周辺コミュニティによって手入れがされ、維持される『自然』」とでも言ったようなもので、これを媒介に周辺コミュニティへの様々な波及効果を期待している点も共通している。この「里山」は先の二分類ではひとまずは Alternative Cultural Narrative に分類されると思うが、多くの遺跡公園で一様に「里山」をキーワードとした整備が今後なされるとなると、国家形成という物語ほど大きな物語ではないが、別種、あるいは別レイヤーの Master Narrative と分類される状況が現出す



写真8 全州韓屋マウル

るかもしれない。

誌上では、山崎健氏が、こうした所謂「縄文里山」なる概念が普及する背景として、環境問題への関心に加えて、近年顕著な昭和30年代を中心とした近過去へのノスタルジーが重ね焼きされている点を指摘している。また、環境考古学的研究からは、縄文時代の人々の行動がそうした場合に生産される「古き良き」自然観とは相容れないものであった可能性も指摘できることから、「自らの語りに自覚的でありたい」と結んでいる(山崎,2010)。その一方で、同じ誌上で、近年は考古学的遺跡のみならず「文化遺産」と呼ばれるもの全般の保護・継承に際しては、個々のコミュニティレベルでの「ストーリー化」の重要性が(西山他,2004)等を引きながら指摘されている(村野,2010)。

Narrative、ストーリーと表現は違えど、今後の「文化資源化」ということを構想する場合には、無知な周辺住民へ「文化遺産」の重要性を説くといった啓蒙思想だけでは理解が得られる訳ではない、という現状認識が基調になっていくと思われる。ただしその場合には、考古学がかつては、そして博物館展示にみるように今でも、Master Narrative 生成に寄与する設計学としての側面が顕著であることへの反省と、新たに語られる Narrative、ストーリーの真正性への疑義も一方で持ち合わせた上で、現代社会における史跡整備は、かつてとは別種の「設計学」であることを意識しておいた方がいいのだろう。

今回の渡航の1週間前、長崎県壱岐市において開催された第9回日韓新石器時代研究会でも、日本側から

は新石器時代遺跡の史跡整備の一例として、九州における貝塚公園の「里山」構想が紹介された。この場合の「里山」概念が韓国でどのように消化されるかは検討もつかない。ただ、急激な経済成長を遂げた先進国の一つである韓国も、環境問題は関心事のひとつではあるらしい。滞在中のエピソードとしては、全羅南道白岫海岸(図1-5)の遺跡を巡ったとき、広大な干潟が広がっており(写真7)、案内していただいた金建洙先生は「地域によっては、縄文時代貝塚がつくられたときの光景はこんな風ではないか」と冗談めかして言っていた⁹。この近辺はこの干潟の存在で大きな港が作れず、小規模漁港が多い。そのことが漁村文化のフィールドワークには格好の地なのであるが、日本でのいくつかの干潟同様、埋立の話は絶えず、それへの反対運動も多いとのことだった。また、全州(図1-3)において韓屋マウル(写真8)という景観保全地区を訪れる機会があったが、そこはファサードは伝統建築の特徴を維持しつつ、建物内部は近代的、という金沢における東茶屋街、岐阜県高山市での古い町並みにも通ずる近過去へのノスタルジーが整備方針の基盤のひとつとなっている点で、日本での様相と共通点が多いと感じた。韓国において日本同様に、環境問題への関心とノスタルジーが結びつき、先史文化の活用にまで影響を及ぼすかどうかは分からない。これまで述べたとおり様々な面で日本と似て非なる韓国において、どのようなNarrative、「ストーリー」が現出するのか、今後も注視したい。こうしたフィールドワークに基づく比較分析の試みが、「文化資源学としての考古学」の重要な方法のみならず、文化資源学自体が学問分野として確立することに寄与できるのではないかと考えている。

引用・参考文献

- アンダーソン, ベネディクト(白石 隆・白石さや訳). 2007. 定本 想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行 -. 東京: 書籍工房早山.
- DOSHITA, Megumi. 2010. Rural Setting as Cultural Resources : Environmental Tourism Practice in Miyama Town, Japan. *Cultural Resource Studies Asian Linkage Building Seminar 2010 Working Papers*. 20-30. Kanazawa : Graduate School of Human and Socio-Environment Studies, Kanazawa University.
- ERTL, John. 2011. Archaeological Tourism and Japanese Ethnic

Landscape. *Report of The International Symposium : Exploring Ethnicity and The State through Tourism in East Asia -Kanazawa University Japan-China Intangible Cultural Heritage Project Volume 13* : 46-57. Kanazawa : College of Human and Social Sciences, Kanazawa University.

- Ikawa-Smith, Fumiko. 1999. Construction of national identity and origins in East Asia : a comparative perspective. *Antiquity*, 73 : 626-9.
- 김도헌(金度憲). 2005. 수렵합정과 사냥법에 대한 검토. *湖南考古學報*, 22 : 69-91. (庄田慎矢・佐藤宏之の訳・解説で日本の学会誌『考古学研究』第53号第1号, 2006年にも収録されている.)
- 木村幾多郎. 2003. 縄文時代の日韓交流. *東アジアと日本の考古学Ⅲ* : 29-56. 東京: 同成社.
- 水ノ江和同. 2003. 朝鮮海峡を越えた縄文時代の交流の意義 - 言葉と文化圏 -. 55-66. 京都: 同志社大学考古学シリーズ刊行会.
- 水ノ江和同. 2007. ふたたび、対馬海峡西水道を越えた縄文時代の交流の意義 - 縄文文化と異文化との接触、言葉と文化圏 -. 73-84. 京都: 同志社大学考古学シリーズ刊行会.
- MOON, Okpyo. 2011. National Heritage and International Tourism : Koreans Visiting Northeast China. *Report of The International Symposium : Exploring Ethnicity and The State Through Tourism in East Asia -Kanazawa University Japan-China Intangible Cultural Heritage Project Volume 13* : 58-64. Kanazawa : College of Human and Social Sciences, Kanazawa University.
- 村野正景. 2010. エルサルバドル共和国における遺跡保護に関する一考察 - 文化遺産国際協力の向上のために -. *遺跡学研究*, 7 : 221-232.
- 西山徳明・池ノ上真一. 2004. 地域社会による文化遺産マネジメントの可能性 - 竹富島における遺産管理型NPOの取り組み -. *国立民族学博物館調査報告*, 51 : 53-75.
- 小熊英二. 1995. 単一民族神話の起源 - <日本人>の自画像の系譜 -. 東京: 新曜社.
- 佐藤宏之. 2000. 北方狩猟民の民族考古学. 札幌: 北海道出版企画センター.
- 山崎 健. 2010. 「縄文時代」の使われ方 - 古環境復元と自然再生事業の接点 -. *遺跡学研究*, 7 : 112-121.
- 吉田泰幸. 2011. ベトナムにおける先史文化の考古学的研究とその資源化に関する研究. *金沢大学文化資源学研究*, 創刊号 : 1-10.

⁹ 関東地方の縄文時代貝塚群が、「かつて豊かな海があったこと」を示すものとして紹介されることがあるが、その場合はかつての東京湾内の干潟が引き合いに出されることがある。